

2019年6月15日配付

山口西田読書会 2019年6月8日のプロトコル

1) 6月8日の哲学的問い

「善きサマリア人は神の促しに自由に応答したのか」

敵対しているユダヤ人を助けたサマリア人のエピソード(ルカ伝)であり、選択の自由とはことなる西田の「意志の自由」を中心とする対話がなされた。詳細は「読書会だより」をご覧ください。

<http://yamaguchi-nishida.org/sanoblog/921>

2) テキスト

2019年6月8日は「内部知覚について」の二節後段(91 ページ後ろから4行目～節の最後まで)を読了した。しばらく欠席していたので、まず一節と二節のおおまかにまとめ、その文脈から6月8日の部分を要約する。

一 外部知覚が不完全であるとし、また内部知覚も対象との厳密なる合一はないとしている。内部知覚は外部知覚より極限にちかい。知覚はマイノングが説明するような表象と判断の単なる結合ではなく、表象と判断の両方を統一する「根本的作用」があるとし、その意識を行為の意識、意志の自覚に求めている。また、明白かどうかは知覚にともなう感情にすぎないとも言っている。そして、内容が即対象となるには「超越的」な意味があるはずだと提起した。

二 知ることを内容と対象の一致と考えればわかりやすいが、そもそも一致などあるのか、との書き出しではじまる。そこには現在と過去との差が生じ、現在と過去が直接経験と判断の関係に似ている。また、現在を「達することのできない」極限としている。

段落が改まり、認識主観と心理的自己との関係を考察しなければならないと述べてあるが、なぜそうなのかはわからなかった。知る自己が、知られる自己ではない(対象化できない)として、現実的なものと超越的なもの、一般的なものと特殊なものとの結合点として自己が位置付けられている。

その後も、極限としての現在、対象化できない自己の深い奥底、動的であること、方向があること、などから「統一」のありさまが説明されている。

以上を受けて、前回(6月8日)の「我々が赤の色から青の色に見て行く時」以降では、わたしたちが「現在に於いて無限なる経験内容の統一点を見」ており、故に唯一の实在界が見えているのだと説明している。その動力は「無限」である。そこでは「行為的主観に於いて時が成立」し、「行為的主観は永遠の現在」であり、「現在は無限の内容」を持っている。わたしたちの知覚作用は、物が何であるかを言い尽くすことはできず、物の中心には近づけない。

3) 哲学的問い

自分らしさとは何か？

対象化できない自己であるとき、わたしたちが口にする「自分らしさ」はどのようなものでありうるか？

岡部